

産調ガールズの奇蹟的な物語

～商業教育を照らす打ち上げ花火に～

山形市立商業高等学校

教頭 伊藤 広幸

生徒商業研究発表大会



1. はじめに

山形市立商業高校は昨年創立百周年を迎えた市立の商業高校です。卒業生は3万4千人を数え、地域産業を支える有為な人材を輩出してきました。全校生840名が山形駅西の広大な敷地と校舎で文武両道を実践する学校です。令和4年度には新校舎が改築され、全館冷暖房、体育館2つ、人工芝グラウンドなどを擁する恵まれた施設になる予定です。特に運動部の多くが全国大会に出場し女子バスケ部・女子バレー部・レスリング部は全国大会常連校です。文化部も多くの部活動が全国大会に出場し、中学生が憧れる学校、入試倍率も県内トップクラスです。



▲令和4年度完成予定の新校舎図

そのような中で10年前まで産業調査部は学校のお荷物的な存在として、部員ゼロのままひっそりと残っていました。創部年はわかりませんが、記録が残っている最古の資料が昭和14年ですので、学校創立当初からあった部です。かつては主に地域産業の研究や山村地域の歴史を調べていた資料が残っています。部員はゼロでしたが商業高校には必要な部活動として休部状態で残っていたのです。

2. 産業調査部 復活の理由

私は平成22年に本校へ赴任しました。赴任前は山形県教育委員会の指導主事として、3年間勤務していました。指導主事の仕事のひとつとして、毎朝その日の新聞から教育に関連する全ての記事を切り抜きます。その際、商業高校・商業科に関係する記事があまりにも少なく、同僚に「商業は何をしているのか県民に伝わってこない」とも言われました。目立つことだけが重要ではありませんが、商業教育を何らかの方法で『PR』することは重要です。正直なところ、商業科指導主事として肩身の狭い思いをしており、学校現場に戻ったらマスコミを利用し、商業教育を『PR』してやろうと思っていたのです。特にこの頃は、商業高校や商業科の統廃合が加速度的に進み始めた時代でもあり、お世話になっている商業教育をなんとか盛り上げたいと思っていたのです。そして赴任した本校で、休部状態の産業調査部を任せられました。商業教育を『PR』する最高の部活動がこれだと思った私は、部員を集め、数十年ぶりに産業調査部を復活させました。

3. 目指す方向は旭川商業高校の発表

初年度はなんとか部員を確保し、日々手探りの状態で活動を開始しました。また、「産業調査部」というお堅いイメージから脱却するために、集めた部員が全員女子だったので「産調ガールズ」という愛称も作り、少しずつ注目度も高まってきました。

その年、生徒商業研究発表大会の県大会に出場しましたが、発表時間を40秒もオーバーして

4位という結果でした。しかし、何故か私には「いつかは全国に出てみたい」という気持ちがあり、当時横浜で開催された全国大会を見学に行ったのです。行く前は『いつかは出られるだろう』という甘い考えだったのですが、会場に着いた瞬間にその考えは無くなりました。会場前で発声練習する学校や会場の張り詰めた緊張感を目の当たりにし、どんな競技でも全国大会は簡単に出られるものではないと教えられました。そして、その大会で一際目立っていたのが『旭川商業高校(以下旭商)の発表』でした。その年の優勝校ではなかったのですが、私は「この学校はいつか必ず優勝する日本一の研究と発表をしている学校だ」と思ったのです。あまりにも感動して涙が出ました。全国大会から戻り、すぐに旭商に手紙を書きました。とても感動したことだけを書いたと思います。そして当時の顧問でいらした太田先生からご丁寧なお返事をいただき、メールでの交流が始まったのです。

本校は平成23年にやっと県大会で優勝し、その冬に旭商まで商業研究部の活動を見学に行きました。どうしても旭商の練習風景を見てみたかったのです。太田先生と野口先生(現顧問)、そして部員の皆さんに温かく迎えていただき、その夜は旭商の先生方とお話をさせていただきました。当時の旭商は、まだ全国優勝したことはなく(その後3回の全国優勝、全国大会出場連続10回)、「旭商が日本一だと思って山形から見学に来た」ということをお伝えすると、皆さんにとっても喜んでいただきました。その時に「平成26年(3年後)に旭川で全国大会があります。旭川大会に出てきてください。皆で待っています」と言っていました。

部員には何度も旭商の発表ビデオを見せ、いつの日か全国大会で旭商と同じ舞台に立つことを目標に活動をしてきました。しかし、県大会は優勝するものの東北大会は勝てません。特に山形市で開催の東北大会では本校が事務局で、部員の多くは自分のクラスの生徒であり、その大会に全国への切符を懸けていました。研究テーマも「宇宙食開発」という注目度も高い研究でしたが結果は5位…全国大会の舞台が遠く霞んだ大会でした。

4. そして全国へ

そして迎えた平成26年は、『旭川での全国大会』の年です。この年は、「色々挑戦～包装紙で色づく街に～」店舗や商店に合う色を調べて、その後で包装紙を考案し提供するというものでした。東北大会での発表前、発表資料は何度も見直し、もうこれで最後のチェックだという時に小さなミスが見つかりました。私としては、時間も無いのでそのまま提出しようとした時に、3年生が「先生、もう一度直しましょう」と言ってきました。その時、何となく「今年行ける」気がしました。この年の全国大会が旭川大会でしたので、私も部員もなんとかして旭川に行きたいと強く思っていました。それでも心の中では全国大会は遠いところにあり自信はそれほどありませんでした。今では当たり前ですが、この大会で初めて完全暗記でセリフを読み、作成した資料は紙質までこだわり大会に挑みました。結果発表前の休憩時間に、全国大会常連校の宮古商業高校の先生が「山商の発表は素晴らしい。上位だと思います」と言ってくださいました。そして結果発表。あの大会では1位から発表されました。「第1位黒石商業高校」ため息と共に今年もダメなのかと思った時、「第2位山形市立…」この瞬間に山商からは歓声とも悲鳴ともつかない声があがりました。3年生は泣いていました。あの瞬間が顧問として一番嬉しかった瞬間であり、現在の産業調査部の始まりでもあったのです。一刻も早く結果を知らせたくてメールを打とうとしても、手が震えて打つことができませんでした。ついに山商産調ガールズは全国大会の切符を手にしたのです。

『初めての全国大会の地である旭川』では、私が見学に行った時の旭商の卒業生から山商の初出場をお祝いしていただき、大会会場では私を見つけた旭商の先生が目には涙を浮かべながら「本当に旭川大会に来たんですね」と堅い握手をしていただきました。山商の発表後は、見学していた旭商の生徒から大きな拍手もいただき「もう満足」という感じでした。事実、部員も一度でも全国大会に出れば良いという考えでしたが、全国大会の舞

台はそんな考えを捨てさせ「もう一度全国の舞台に立ちたい」と毎年思わせてくれます。その後は、全国大会に出場すれば必ず旭商の部員と記念撮影をしてきました。まさに旭商は山商にとって憧れの存在であり、その上に行くことなど考えてもいませんでした。



▲旭川での全国大会、旭商と夢の記念撮影

5. 憧れからライバルへ

それが変わったのが平成 28 年宮崎全国大会でした。私はこの年より内部昇格し教頭となりました。創立百周年事業や校舎改築事業を抱え、教頭二人制になったのです。そして教頭でも産業調査部の顧問を続けることになりました。部員や保護者の要望もありましたが、何よりも私自身がこの生徒研究発表大会にはまってしまったのです。当初の目的である『商業教育の PR』はもちろん忘れてはいませんでしたが、それよりも全国大会に出場したいという気持ちが勝っていました。

山商の研究は「毎年違う研究」と「どの学校もしてない研究」にこだわっています。この頃は様々な方より「山商の発表は面白い」という評価を得ていました。文化的な大会には多少の『運』もあると思っています。その運は日頃の活動の積み重ねの他に、服装や生活態度をしっかりする等があると思っています。活動をやるだけやって、日々の生活も一生懸命。そして、あとは良い結果になるように強く祈る。『念ずれば花ひらく』ののだと いつも話していたのです。事実生徒の服装は校内でも模範となり、学習成績も伸び始めました。

転機となった平成 28 年も、全国優勝を掲げながら、心のどこかで「初入賞」したいというのが本音でした。その宮崎会場で、信じられない物を

私たちは見つけてしまったのです。それが『念ずれば花ひらく』の文字です。会場に大きく掲げられていました。それを見た時に鳥肌が立ち、何か起きる予感があったのです。結果は旭商に次いで全国第 2 位、私は優勝できなかった悔しさよりも、旭商に近づいた満足感の方が先にありました。そんな私に 2 年生が「先生が 2 位で満足している姿にガッカリした」と言いました。「自分たちは本気で優勝したい、旭商に勝ちたい」と言ったのです。その時から、私の中でも旭商は「憧れ」から「ライバル」へと変わりました。



▲宮崎会場で見つけた『念ずれば花ひらく』

そして迎えた翌年、平成 29 年長野全国大会、自分たちでできる最大限の準備をして臨み、再びの奇蹟を目にしたのです。訪問した善光寺で「このお寺に『念ずれば花ひらく』のお地蔵様がいます」と部員が言ったのです。私と部員で境内を探したところ、参道に柔らかに微笑む『念ずれば花ひらく』のお地蔵様を見つけました。その瞬間に何故か「優勝できる」という直感が走りました。結果、2 位の旭商と実に 1 点差という奇蹟の優勝を成し遂げたのです。控室で生徒と肩を抱き合い、とめどなく涙が流れました。そして、1 点差という結果がわかった後、旭商の生徒と先生は山商の席まで来ていただき、「おめでとうございませう」と言葉をいただきました。1 点差の悔しい状況の中で『おめでとう』と言える旭商は、やはり山商が「目指した学校」であり「憧れの学校」である



▲長野善光寺の『念ずれば花ひらく』地蔵様

と再認識しました。

その後、平成30年には全商協会創立70周年の記念式典において、初優勝した研究の荣誉ある発表をさせていただきました。そして同年の全国大会で史上初の全国2連覇を達成。その様子は、地元テレビ局より全国初優勝の後から1年間の密着取材を受け、合計5回のドキュメント番組放映となりました。そして、その中の一つがテレビ朝日系「日本のチカラ」で全国放映されました。早朝の時間帯だったにも関わらず多くの反応があり、他県の商業高校から「テレビを見て感動した」「自分たちの県も頑張らなければならない」等の感想をいただきました。私が旭商を訪問したように、他県から視察を受けるようにもなりました。



▲全商協会創立70周年記念式典で発表披露

6. 産調ガールズ 全国への意気込み

近年は、産業調査部に入部するために本校へ入学してくる部員も増えてきました。そして、入部後は多くの者が学習成績も良くなります。常に半数以上が成績上位者に名を連ね、服装や髪型も立派です。このようにしている大きな理由は「全国

で勝つには」と常に考えているからです。先述したように『運』も作用するであろう発表大会で、その『運』を味方につけるのは日頃のしっかりした生活態度だと思っているからです。ゴミも拾います。大会前には自分たちが使用している教室や廊下、そしてトイレ掃除を行います。特にトイレは徹底して掃除します。実は保護者に驚かれることがあります。それは、部員が大会前に自宅のトイレを掃除しているということです。一つでも多くのトイレ掃除をすれば運が良くなると信じ、大会前には不安でトイレ掃除でもしていないと落ち着かないというのです。この行為は偽善者的で本物の行為ではないかもしれません。しかし、それをやり続けることによって「癖」になり、その行為は「本物」になると思います。

また、山商の発表は「山商スタイル」というものがあります。基本は全員で発表するという事です。調査や研究は全員で行っている訳なので、全員で発表もしたいのです。現在22名の部員ですが、最大でも24名までと決めています。つまり1学年は最大8名です。理由は、全員で発表するにはこれ以上は無理だからです。中学の運動部ではレギュラーも補欠もいますが、本校の産業調査部に入部した理由の一つに、そういう争いに疲れたからということもあります。そうであるならば、補欠無しの全員で調査研究して発表も全員でしようと思っています。もちろん、大会で山商の大人数がステージに立つと他校に比べて違和感がありますし、時に「何故そんなに人が必要なのだ」という意見もありますが、最大限に役割を持たせるために次のようにしています。

・台詞の読み手	6～8人
・台詞のサポート	2人
・パソコン操作	2人
・タイムキーパー	1人
・照明	2人
・小道具パラパラ	他全員

小道具パラパラとは、発表の最後に研究テーマとサブタイトルを大板で見せる係です。そしてこれは1年生が担います。出ている時間は10秒ほどですが、1年生は先輩のために全てを尽くしま

す。私としては見ていて一番胸が熱くなるシーンです。1年生は初めて全国大会の会場を舞台上から見ることになり、その輝く舞台に自分も立ちたいという思いが次への原動力となっています。



▲通称「パラバラ」を持つ1年生

7. 財産は「気がいたら山形が好き」

多くの方からの質問に『高校生が何故そこまで郷土愛を持てるのか』というものがあります。

研究テーマは部員で1ヶ月以上かけて決めます。すると調査対象は身近な地域になります。研究の内容を濃いものにするために、時には飛び込み調査（アポなしの店舗訪問）や街中でのアンケート調査、最近では連携依頼の相談も部員が行きます。最初こそ嫌がるものの、慣れると楽しくなると言います。つまり、世代を超えた人たちと話をする「きっかけ」が作れる事で、楽しいと答える者が殆どです。また、調査される方々も、高校生の活動に理解を示していただき非常に協力的です。そうしているうちに不思議と郷土愛が芽生え始めます。特に顕著な取り組みは「駅からハイキング」です。これはJR東日本との共催で行うもので毎年5月に行っている旅企画です。山形駅発着で市内の名所や高校生に人気の場所などを部員が案内するものです。そこで、ゲスト（お客様）に説明するために色々なことを調べます。すると初めて知ることが多すぎるのです。例えば、文翔館という旧県庁であった建物があります。多くの大人はそこが当たり前で県庁であったとわかっていますが、意外にも多くの高校生はその事を知りません。私たちがわかっていると考えている事でも知らな

い事が多い。この部活動を通して地域の知らない事をいつの間にか知っていく、そして関心を持って行く、そして気づくと山形が好きになっているというのが現状です。本当は、山形が好きだから地域活性化の為に研究しそれを発表するというのが本筋かもしれません。しかし今は、全国大会に行くための方法を考えているうちに、地域活性化になっていて、それが地域の大人から高く評価される。そして進路先も部活動でしていた様な仕事をしたということ、『市町村職員』となる者が多くなってきました。進学で県外に行ったとしても最終的には地元に戻ってくる者も多くなってきました。つまり、この活動を通して、最初は全国の舞台に立つことを目標に活動していますが、「気がついたら山形が好き」になっているのです。

8. おわりに

現在、全国3連覇を目指して部員は活動しています。部員ゼロから始まった部活は、学校のお荷物から学校を代表する部活になりました。最初の目的でもある『商業教育の活性化』も忘れてはいけません。私は学生時代に五教科の学びを楽しいと思っことはありません。商業科で学んだことも無いのですが、商業教育の「学び」を初めて楽しいと思えました。そして夢であった教員にもなることができました。商業教育は私に多くの夢を与えてくれたのです。その商業教育が危機的な状況にある時に考えた事があります。それは、打ち上げ花火をドンドン上げて、少しでも商業教育を照らしたいという事です。打ち上げ花火ですから輝きは一瞬で終わりますが、上げ続けることで少しは目立ち、そして照らしているところを見てくれる人も現われると思っています。今は山形県で一番報道される文化部になり、それを見ていただいた県内外の商業科の先生方からの激励は、部員にも私にも最大の活力になります。産調ガールズのブログタイトルは「産調ガールズの奇蹟」から「夢」「物語」と変わりました。これからも商業教育に刺激を与えられる物語を部員と続けていきたいと思ひます。